

恵みの雨

森野 水琴

彼は神田祭で神輿を担いでいる。
心配した雨も上がり、曇り空の下、次第に担ぎ手たちの熱気が立ち込める。
肩への神輿の重みに汗ばみながら、潤いをと天に祈る。
祈りが通じて、ひとしきりの雨。良いお湿りになり潤っていく。
休憩所が見えて、ひと安心していたら、乙女たちが担ぎながら泣いている。
感動の涙に彼の心も洗われる。
四年ぶりの神輿が恵みの雨に揺れながら喜んでいる。
また担ぎたいものだ、彼も喜んでい